慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	帝国と人種 : コンラッド『闇の奥』と人類学の黎明期
Sub Title	Empire and race : Conrad's heart of darkness and the dawn of anthropology
Author	阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.2 (2010. 2) ,p.327- 365
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100228-0327

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

帝国と人種

——コンラッド『闇の奥』と人類学の黎明期——

阿久津昌三

一　はじめに
二　コンラッドの人種概念とアチェベのコンラッド批判
　1　『闇の奥』の人種概念
　2　アチェベと『闇の奥』
三　ポーランドの祖国喪失者——コンラッドとマリノフスキー
　1　コンラッド——文学のフロベール
　2　マリノフスキー——人類学のコンラッド
四　『闇の奥』と民族誌
　1　文化の窮状——コンラッドとマリノフスキー
　2　コンラッドとマリノフスキーの多言語世界
五　おわりに

一　はじめに

ハナ・アーレントが、ジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）の『闇の奥』（*Heart of Darkness*）（一八九九年）[1]の作品に依拠して人種概念について語っているのは『全体主義の起源』第二巻「帝国主義」第三章「人種と官僚制」においてである。アーレントが依拠するのは『闇の奥』のなかで語られる文学的記憶である。

「二十世紀の人種思想に決定的意味をもったのはヨーロッパ人がアフリカで味わった経験であるが、これが初めてヨーロッパの人びとの意識に広く浸透するようになったのは『アフリカの争奪戦』と膨張政策によってである。アフリカに根を下ろしていた人種思想は、ヨーロッパ人が理解することはおろか自分たちと同じ人間と認める用意さえできていなかった種族の人間とぶつかったとき、その危機を克服すべく生みだした非常手段だった。（中略）人種妄想を正当化しうる根拠は、理論的なものであれ政治的なものであれ存在しない。したがってそれを生んだ驚愕を理解するために、民族学者に教えを乞うても無駄である。民族学者はまさにこうした恐怖からこそ自由でなければ研究が成り立たないのだから。また、人種主義狂信者はこの驚愕を超越していると自称するゆえに、さらには、あらゆる種類の人種思想に正当にも戦いを挑む人びとは、人種思想はおよそいかなる現実的経験の基礎をもたないと考えるもっともな傾向があるゆえに、いずれも役に立たない。それよりはコンラッドの小説『闇の奥』のほうが、歴史、政治、比較民族学のこの問題に関する書物よりもこの経験の背景を明らかにするのに適しているだろう」（大島道義・大島かおり訳による。一部改変）[2]。

高橋哲哉は、『記憶のエチカ』（一九九五年）のなかで、ある種の歴史的経験を記述するのに文学テキストを援用するのはアーレントの常套手段であると述べている。プルースト、キプリング、カフカ、そしてコンラッドなどの作家たちの文学作品である。高橋哲哉は、アーレントが、「人種妄想」の起源にある「驚愕」と「恐怖」に接近するために、なぜコンラッドの『闇の奥』に依拠するのかを探究している。その論点をまとめれば次のよう

になるだろう。第一に、『闇の奥』はブーア人の経験を描いたものでも、それをモデルにしたものでもない。確かに、アーレントは『全体主義の起源』のなかで、「ブーア人はまったく文学を創造しなかったため、彼らがヨーロッパ民族から未開民族の首長へと変わっていった発展段階を、われわれは推測できない」と記述しているが、十七世紀半ばに南アフリカに渡ったオランダ系移民のブーア人の文学作品によって「白人人種化」の記憶をたどることができないから、アーレントがコンラッドの『闇の奥』に依拠することによって「文学的記憶の不在」を補填する「別の場所」についての「別の文学的記憶」をたどろうとすることには問題があるということである。つまり、『闇の奥』は作者自身のコンゴ旅行の「経験の記録」であるが、これは南アフリカに渡ったオランダ系移民のブーア人の「経験の記録」を証言するものにはならないということ。第二に、アーレントは、「コンラッドの小説『闇の奥』のほうが、歴史、政治、比較民族学のこの問題に関する書物よりもこの経験の背景を明らかにするのに適しているだろう」と述べているが、『闇の奥』の作品は、ナイジェリアの作家チニュア・アチェベのコンラッド批判にもあるように、大英帝国を中心とするヨーロッパの帝国とその植民地という地政学的構造をもった「人種」にかかわる本質的な「政治」を含んだ作品なのであるということ。第三に、コンラッドの『闇の奥』に依拠するのは、『全体主義の起源』第二巻「帝国主義」第五章「国民国家の没落と人権の終焉」にあるように、「〈ヨーロッパ人がアフリカで行った恐るべき殺戮〉はヨーロッパ人がでなく、アフリカ化したヨーロッパ人が行った」という言説はあくまでもアーレントの「アフリカ観」によるものであるということである。[3]

アーレントの『全体主義の起源』のなかでも『闇の奥』の作品がもっとも長く引用されている箇所がある。

「これらの前史的人間がわれわれを呪ったのか、崇拝したのか、それとも歓迎したのか、誰がそれを言えただろうか。われわれは周囲の理解から遮断されていた。精神病院の狂騒を目のあたりにしたときの正気の人間のように驚きとひそかな恐怖に満たされて、われわれは幽霊のようにそこを通り過ぎていった。われわれはあまりにも隔たっていたために

理解できず、原始の時代の闇――ほとんど痕跡も、いかなる記憶も残さずに遠く過ぎ去ったかの時代の闇に迷い込んでしまったために、記憶することもできなかった。大地はこの地上のものとは思えなかった――そして人間は――いや、彼らは人間でなくはなかった。そうなのだ、これが一番始末の悪いことだった――彼らも人間ではなくはないらしいというこの疑惑が。それはじわじわと心にしのび込んだ。彼らは吠え、跳びはね、回転し、そして恐ろしい形相を見せた。しかしおぞましさに戦慄が走るのは、彼らが人間だと考えるとき――われわれと同じ人間で、この野蛮と激情の狂騒が遠いところでわれわれの血とつながっていると考える時だった」（大島道義・大島かおり訳による。一部改変）。[4]

アーレントは、コンラッドの『闇の奥』の作品から、「理解することはおろか自分たちと同じ人間と認める用意さえできていなかった種族とぶつかったとき」の「恐怖」と「驚愕」を引き出している。「前史的人間」（pre-historic man）や「正常」と「異常」、「ほとんど痕跡（sign）も、いかなる記憶（memories）も残さずに遠く過ぎ去ったかの時代の闇」という表現には、アーレントが『闇の奥』の記憶からボーア人の「白人人種化」のプロセスを進化論的に説明しようとした意図が透けて見える。『全体主義の起源』第二巻「帝国主義」第三章「人種と官僚制」の「暗黒大陸の幻影世界」という表題にある「暗黒大陸」の「暗黒」とは、これらの記憶の「闇」、記憶の《闇の奥》としての「暗黒」である。また、精神病院の患者のように「人間でなくはなかった」（there were not inhuman）、「人間ではなくはないらしい」（there not being inhuman）という疑惑をとおして、「人間」と「民族」の終わりは「ヨーロッパ」の終わりのひとつであり、「ヨーロッパ」の終わりは「ヨーロッパの外部、暗黒大陸アフリカ」の始まりであるというアーレントの「アフリカ観」が抽出されるのである。[5] アーレントが『闇の奥』に依拠する論理、また、アーレントが依拠することでコンラッドに責任転嫁する論理には「白人人種化」、つまり「ヨーロッパ人の悪魔化＝アフリカ化」という論理が意図されているのである。

「彼らはコンラッドの『闇の奥』のクルツ氏のように〈骨の髄まで虚ろであり、無鉄砲だが意気地なく、貪欲だが剛

毅さはなく、残虐だが勇気はない〉。彼らは何ものも信ぜず、それでいて騙されやすく、人に言われれば何であろうとすぐに信じ込んだ。社会とその価値評価から吐き捨てられた彼らは自分自身しか頼るものがなく、そしてこの頼るべく自分自身は無に等しいことが明らかになった。だがたまたまクルツ氏のように他の者よりいささか才能に恵まれた者がいると、そのような人間はその才能によって遥かに危険な人間となった。とりわけ、アフリカのジャングルを出て故国に帰れた場合がそうだった」（大島道義・大島かおり訳による。一部改変）[6]。

ここでアフリカに流れ込んできた余計者とはヨーロッパ人であることに留意しておくことはきわめて重要である。彼らはコンラッドの『闇の奥』のクルツ氏のように「骨の髄まで虚ろであり、無鉄砲だが意気地がなく、貪欲だが剛毅さはなく、残虐だが勇気はない」（hollow at the core, reckless without hardihood, greedy without audacity, and cruel without courage）人びとである。アーレントが、「ヒトラーは『人種』という言葉を本質的に政治的な概念の意味で使って〈われわれは人種ではない。まず人種にならなければならない〉とくり返し強調していた」と語るとき、「ナツィの文筆家たち」の「多くがアフリカ生まれの在外ドイツ人だったことは偶然ではない」という言葉は重い。アーレントは、コンラッドの『闇の奥』の作品を意図的に変更して合成しているのである。

「彼ら（引用者注・ボーア人）のなかには今日もなお、彼らの父祖たちを野蛮状態に逆もどりさせる原因となった最初の身の毛もよだつ恐怖が生きているのであろう――ほとんど動物的な存在、つまり真に人種的存在にまで退化した民族に対する底知れぬ不安、その完全な異質さにもかかわらず疑いもなくホモ・サピエンスであるアフリカの人間に対する恐怖が。なぜなら人類は、未開の野蛮部族を目のあたりにしたときの驚愕をたとえ知っていたにせよ、個々の輸入品としてではなく大陸全体にひしめく住民としての黒人を見たときのヨーロッパ人を襲った根源的な恐怖は、他に比すべきものをもたなかったからである。それは黒人もやはり人間であるという事実を前にしての戦慄であり、この戦慄から直ちに生まれたのが、このような『人間』は断じて自分たちと同類であってはならないという決意だった。この不安と

この決意との根底には、人間であることの事実そのものに対する疑惑とおそらく絶望とが潜んでいた」（大島道義・大島かおり訳による。一部改変）[7]。

本稿は、コンラッドの『闇の奥』の作品をとりあげることによって、この作品のなかで人種概念がどのように記述されているのかを検討するとともにナイジェリアの作家チュニア・アチェベのコンラッド批判をとりあげる。次に、ポーランドを祖国とするコンラッドとマリノフスキーの足跡をたどることで彼らの多言語的な世界を明らかにし、さらに、『闇の奥』と『西太平洋の遠洋航海者たち』の作品をもとにコンラッドの文学的自己成型とマリノフスキーの民族誌的自己成型との対比において彼らにとって「英語」（English）とは何か、「イギリスらしさ」（Englishness）とは何かを明らかにすることで、彼らの文化の窮状はどのようなものであったのかを検討することが課題である。

二　コンラッドの人種概念とアチェベのコンラッド批判

1　『闇の奥』の人種概念

コンラッドの『闇の奥』の作品には人種概念がどのように登場してくるのであろうか。『闇の奥』にはいくつかの人種概念が書き分けられているが、race の概念はテムズ河の河筋に下ろした錨の綱をピンと張って、帆布一つ動かさず、静止している二本マストの小型巡航帆船ネリー号の場面に登場してくる。ネリー号の船主である会社重役、老弁護士、会計士、そして小説の始まりの口上を述べマーロウを導入する第一人称の名前のない「私」、この社会的な類型としてのみ同定される四人がマーロウの話の聞き手であり、英国紳士たちである。

「時を移さず河面にも変化が起きた。あたりの静けさは輝きをやや失いはしたが、かえってその深遠さを増した。こ

れまで長い年月にわたって、その両岸に住む種族（やから）に豊かな余沢を恵んで来たこの老大河は、いまや落日の下に漣波（さざなみ）一つ起らず、遥か地の果てまでも続く水路の威厳を誇るかのように、広々と静まり返っていた。われわれはこの由緒ある河の流れを、ただ永遠に来ては去る短い一日のあざやかな夕映えの下に眺めていたのではない。もっと悠久な記録をとどめた、荘厳ともいうべき光の下に眺めわたしていたのだ。畏敬と愛とをもって〈海に生きてきた〉ものならば、あのテムズ河の下流の水域を眺めわたして、この河の過去にまつわる偉大な精神を思い浮かべないものはあるまい。不断の恩沢をもたらしながら、あるいは故郷の安らかな休息へと、あるいはまた海の戦いへと、数知れぬ人と船を載せて送った、そのさまざまな想い出を秘めたまま、いまもなおたえまなく満ち干を繰り返しているのだ」（中野好夫訳による。大幅に改変）[8]。

当時、ロンドンは「流れ者」が生息する暗黒の都市であった。コンラッドは小説『情報機関』（*The Secret Agent*）のなかでロンドンを「世界の光を無残に食いつくし（中略）五百万の人間を呑みつくす広大な暗黒」と語っている。ロンドンはコンラッドにとって「暗黒」であった。しかしながら、彼が長い亡命生活に終止符を打って、住みつこうとしたのがロンドンでありイングランドであった[9]。彼の長い亡命生活を慰めてくれるのがコンラッドも描いている「両岸に住みついた人種（race）に良き奉仕を続けてきたこの老大河」の「テムズ河」であった（中野好夫はraceに「種族」の訳をあてていることに留意されたい）。コンゴ河とテムズ河の流域にみる人種の集積は「恐怖」と「驚愕」／「畏敬」と「愛情」という対比はあるものの、どちらの河も記憶の「闇」につつまれているのは同じである。アーレントの言葉をもじれば「ヨーロッパ」の終わりは「ヨーロッパの外部、暗黒都市ロンドン」の始まりといえるだろうか。テムズ河は、そのThamesの語源は「暗い」（*Temse*）という、沼沢地も多く、近づきにくい未開地の河川に由来するが、冒険家、移住者、王たちの船、取引所商人の船、船長、提督、東洋貿易の「もぐり商人」、東インド会社の船隊の「お偉い商人」たち、黄金や象牙や奴隷を探し求める者など

が出航していった「過去」にまつわる「偉大なる精神」が集積する「記憶」装置でもあった。「人間たちの夢、連邦の種子、帝国の萌芽」は大英帝国の繁栄を象徴している。しかし、「ここもねえ」とマーロウが突然口を開いて「地球上の暗黒の地のひとつだった」（The Thames has been one of the dark places of the earth）と語る言葉には帝都ロンドンが暗黒都市であることを表象している。しかしながら、『闇の奥』の作品のなかでは、ロンドンには地名がついていないことに留意する必要がある。単に「町」であり、それに「もっとも大きくもっとも偉大な」、あるいは「怪物のような」という形容詞が添えられているだけである。正木恒夫はここに『闇の奥』の作品には遠近法による時間と空間の巧妙なすり替えがあると読みとっている。

「コンラッドが選んだのは、『私』の歴史的回想を通じて近景をいったん時間的に遠景化する方法であった。暮れなずむテムズの川面を眺めながら、『私』の想像力はいつしかその風景の中に過去の偉大な航海者たちを住まわせはじめる。この川を下って世界中に散っていった彼らの輝かしい業績に思いをはせるうちに、ほの暗い水路が一瞬明るく燃え上がるかのようであり、デトフォード、グリニッジ、イアリスなど近景の地名をそのまま保ちながらも、目前の川が十九世紀から十六世紀へと時間を遡行しつつ次第に過去の風景の中にすべりこんでいく。こうして『私』のナイーブな想像力が作りだした光の川を一挙に闇に引き戻すのは、現実の日没と、〈この辺りもかつて暗黒の地だったわけだ〉と語りはじめるマーロウの言葉である。マーロウの語りは最初『私』の時間的遠近操作を引き継ぎ、遠景化をいっそう徹底させることから始まる。マーロウが描いてみせるのは、さらに十数世紀をさかのぼる紀元前後のテムズ川である。この再度の遡行によってマーロウは、一瞬のうちに光から闇へと劇的な場面転換を実現する。なぜなら紀元前後のブリテン島は〈世界の最果て〉、ローマからきた征服者たちの定住を峻拒する暗黒の蛮地であったからである」[10]。

テムズ河に集積する人種は小文字の race で表現されていることはすでに述べたところであるが、コンラッドの『闇の奥』のなかでは、ローマ人、デンマーク人、イギリス人、スウェーデン人、スコットランド人、フランス人、ロシア人の「白人」（white man）が登場する。とすれば、テムズ河の両岸に住み着いた人種 race とはど

のような人びとであったのだろうか。また、小文字の race の概念が大英帝国のなかでもイングランド人の眼差しにより他者化された人びと――例えば、アイルランド人などを指示するのに今日的な意味で使われるようになるのはいつなのだろうか。コンラッドにとってテムズ河に集積する人種は小文字の race で表現されているのに対して、コンゴ河に集積する人種は白人との対立関係のもとに、nigger、black fellow(s)、black man などの「黒人」と表現されている。

「だから、彼は、思い切りこの老黒奴を引っぱたいた。部下の村民たちは、呆気にとられて眺めているばかりだった。だが、その時だった、とうとう彼等の一人――酋長の息子だということだったが、――年老いた親父の悲鳴を聞くと、矢も楯もたまらなくなって、ほんの突くともなしに、白人めがけて槍先を突き出したのだ――もちろん槍先は、みるまに肩胛骨の間に突き刺さった」（中野好夫訳による）[11]。

「来る日も来る日も、陸地は、まるでわれわれが動いていないかのように、少しも変わらない。だが、ずいぶんいろんな場所に寄港した、――貿易港――たとえばグラン・バッサム、リトル・ポポ（いずれもアフリカ西海岸、象牙海岸及び奴隷海岸地方の地名）などといった、あの毒々しい背景幕の前で演じられる、猥雑な茶番劇の中にでも出て来そうな名前の場所もあった。なにもすることもない乗客の無為な生活、そしてこうした人々の中にあって、彼等とはなに一つ触れ合うもののない僕の孤独、物倦い、油のような（引用者注・感じの物憂いの）海、涯てしなくつづく暗鬱な陸地、それらは、僕の心をなにか憂愁に充ちた、そこはかとない妄想に押し包んで、物の現実というものから、はるかに遠く隔ててしまうように思えた。ときどき耳につく浪の砕ける音が、まるで兄弟の言葉をでも聞くような、大きな喜びだった。自然な、そして理性を持ち、意味をもった声のように聞えるのだ。ときに岸から漕ぎ出している小舟が、ほんの束の間ではあるが、人々の心をチラと現実に触れさせてくれる。漕ぎ手は黒奴だ。遠くからもう、彼等の白い眼球の光るのが見える。なにか大声に叫んだり、歌ったりしている。身体じゅう滝のような汗だ。顔は奇怪な仮面をそのまま――だが、彼等にも骨格、筋肉、そして激しい生活力はあるのであり、その激しい活動力は、あの岸に寄せる浪のように、

自然であり、そして真実でもあるのだ」（中野好夫訳による）[12]。

ここでは、コンラッドは「彼は、思い切りこの老黒奴（ママ）を引っぱたいた」の場面では「黒人」について nigger と記述している。また、「彼等の白い眼球の光るのが見える」（you could see from afar the white of their eyeballs glistening）とも「顔は奇怪な仮面をそのまま」（faces like grotesque masks）――「だが、彼等にも骨格、筋肉、そして激しい生活力はあるのであり、その激しい活動力は、あの岸に寄せる浪のように、自然であり、そして真実でもあるのだ」（but they had bone,muscle, a wild vitality, an intense energy of movement, that was as natural and true as the surf along their coast）という漕ぎ手の「黒人」については black fellows と記述している（中野好夫は、nigger、black fellows を「黒奴（くろんぼ）」と訳していることに留意されたい）。

コンラッドは、このように、コンゴ河に集積する人種を白人（white man）との対立関係のもとに、nigger、black fellow(s)、black man などの黒人（black man）と表現している。ウェブスター『新国際辞典』第二版によれば、nigger の第二の用法には「東インド諸島民、フィリピン人、エジプト人など、非常に色の濃い皮膚を有する人種の一員をさす不適切で曖昧な用語」とある。また、メルヴィン・ブラッグの『英語の冒険』（二〇〇三年）によれば、「黒人―ラテン語で黒を意味するニグルム（に由来するニグロ（Negro））またはラテン語がフランス語のネーグル（négre）を経て英語に変形したニガー（nigger）は語源をたどれば差別的な意味をもっていなかったが、大英帝国の植民地支配が進展する過程で劣った人種で文明をもたないという人種差別の言葉に転化して、現在でも、英語圏の各地で深い侮蔑の響きをもつ、受入れがたい、挑発的な言葉」となっている。n*gg*r、n**ger、n-word の伏字で表記されるようになっている[13]。

2　アチェベと『闇の奥』

ナイジェリアを代表する作家チュニア・アチェベが『闇の奥』の作品をとりあげてコンラッドの人種主義を批判したことは英文学史のひとつの革命であった。アチェベがジョウゼフ・コンラッドを「べらぼうな人種差別主義者」(a bloody racist)(後に「徹底した人種差別主義者」a thoroughgoing racist に修正した)と批判したことが、コンラッドの作品がポストコロニアル、あるいはカルチュラル・スタディーズの隆盛とともに大学で最も読まれる文学的テキストになる契機となったことは確かである。(14)

一九七五年二月、アチェベはマサチューセッツ大学の英文学科で教鞭をとっていたときに「アフリカのイメージ―コンラッド『闇の奥』のなかの人種主義」と題して講演をしている。この講演はある天気の良い秋の朝の散歩の話から始められるが、マサチューセッツという異郷の土地でアチェベは自分が黒人であることを再認識させられたのかもしれない。オックスフォード大学の著名な歴史家ヒュー・トレヴァ＝ローパー(Hugh Trevor-Roper)の「アフリカ史は存在したのか」という言葉を思い浮かべながら、アメリカとヨーロッパとアフリカという地政学的な位置関係のなかでコンラッドの『闇の奥』の文芸批評と講義は本題にはいっていくのである。テムズ河とコンゴ河を対比させた、ヨーロッパとアフリカの「文明」と「未開」という『闇の奥』の作品にみられる光と闇の世界、善と悪の世界。アチェベは、コンラッドの『闇の奥』の作品のなかで、(1)「ある測りがたい意図を抱えた冷酷非情な力を備えた沈黙」(it was the stillness of an implacable force brooding over an inscrutable intention)、(2)「黒々とした不可解な狂乱のへりをスレスレに、船はゆっくりと遡航の骨折りを続けた」(the steamer toiled along slowly on the edge of a black and incomprehensible frenzy)というテキストに注目する。アチェベは「不可解な」(inscrutable)、「言葉に表わせない」(unspeakable)、時には「神秘的な」(mysterious)などの形容詞がテムズ河を描写するように蒸気船がコンゴ河を遡上する川面の風景のように変幻すると批評する。つまり、アチェベはコンラッドの形容詞を強調する文体をとりあげて批判をしている。このことにつ

いてはポーランドの詩韻の伝統にもとづくコンラッドの作品のポーランド語への翻訳に関する論文があるのであまり触れないが[15]、アチェベにはコンラッドの文体が「英語」であるという偏見があるのではなかろうか。これはEnglishnessとの関係で再検討しなければならないのである。また、アチェベはコンラッドの人間（human）と非人間（inhuman）に着目している。アチェベはアーレントと同じテキストの部分を引用している。アチェベはこれらの文章のなかでも「大声で叫んだり、歌ったり、からだは流れる汗で濡れている。グロテスクな仮面のような顔つきだが、そのがっしりした骨格、筋肉、荒々しい活気、強烈にエネルギッシュな身のこなしは、岸辺に続く白波のように自然で真実味があった」（they shouted, sang; their bodies streamed with perspiration; they had faces like grotesque masks——these chaps; but they had bone, muscle, a wild vitality, an intense energy of movement, that was as natural and true as the surf along their coast）、「こちらを戦慄させるのは、彼らも人間だ——君らと同じような——という想い、眼前の熱狂的な叫びと、僕らは、遥かな血縁で結ばれているという想念だ」（what thrilled you was just the thought of their humanity—like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar）に続く次のような部分「醜悪、そう、たしかに醜悪だった」（Ugly. Yes, it was ugly enough）にコンラッドの「西洋のこころ」（Western mind）を読みとっている。

「それにときどきは土人（ママ）の火夫の監督もしなければならなかった。こいつはいわゆる熟蕃（ママ）だったが、上手に直立汽罐を焚いた。こいつが僕のすぐ足の下で働いているわけだが、まるでそれはズボンを穿いて、羽根帽子を冠り、後足で立った犬芝居そっくりときてる、いやはや、大した観ものさ。とにかく小利口な奴だった、わずか二、三ヵ月の訓練でこれだけになったのだから。いかにも不敵そうな顔付きで、気圧計と水量計を藪睨みの眼で睨んでいる、——可哀そうに、歯には鑢（やすり）をかけられ、縮れた頭髪は奇妙な型に剃り落とされ、両頬には三筋ずつ刀痕が装飾に刻まれていた。彼などもやはり、あの河岸で、手を拍ち、足を踏み鳴らしている方がよかったのだろう。それが今は、なまじ余計な知識など注

ぎ込まれ、奇妙な魔法に縛られて、あくせく汗を流しているわけだった」（中野好夫訳による）[16]。

アチェベはコンラッドが『闇の奥』の作品のなかで野蛮人（the savage）を教化された奇妙な人間（an improved specimen「改良見本」）と描写していることを批判する（中野好夫は、「いわゆる熟蕃」と訳している。「熟蕃」とは大日本帝国が台湾を植民地支配した時に支配に従属した先住民を指す言葉である）。コンラッドは「熟蕃」は「後ろ脚で立ち歩きの曲芸をしている犬」（a dog in a parody of breeches and a feather hat, walking on his hind-legs）に似ているとも表現し、また「歯を研いで鋭くしていたし、頭の縮れ毛は奇妙なパターンに剃り込み、両頬には刀傷が飾りに三筋いれてあった」（he had filed teeth, too, the poor devil, and the wool of his pate shaved into queer patterns, and three ornamental scars on each of his cheeks）という彼らの野蛮な身体変工について、さらに、「改良知識を注ぎ込まれ、妖術にとり憑かれている」（a thrall to strange witchcraft, full of improving knowledge）とまで描写している。しかも引用された文章の後には「下唇には懐中時計ほどもある大きさの磨き上げた骨が平面的に入れ込んであった」（a piece of polished bone, as big as a watch, struck flat-ways through his lower lip）という表現が続いているのである。コンラッドは『闇の奥』の最初の部分でイギリスの航海者、北極探検家のジョン・フランクリン卿の名前を出しているが、コンゴ河の流域に住んでいる人びとのカニバリズム（cannibalism）という「人喰い」の慣習にコンラッドが並々ならぬ関心をむけたこともアチェベの批判の根本的な要因のひとつでもあった。これは次のような部分である。

「彼等の首頭だという、胸幅の広い、おそろしいような鼻の孔をした黒奴（ママ）の青年――身体にはなにか濃藍の縁取りをした簡単な粗布を纏い、頭髪を油でゴテゴテと捲毛に結い上げたのが、僕の傍に来て立った。――やあ、と僕は、ただ仲間の挨拶だけに声をかけた。と、彼は、眼を大きく血走らせ、鋭い歯並をキラリと光らせながら、『取っ捕えろ、取っ捕えろ。そいで俺等にくれよ、ね、』と吐き出すように叫んだ。『君等に？　いったいどうするというんだ、それ

を?』と、僕は訊き返した。『食べるだね、』と、彼は一言ズバリ答えた。そして倚りかかるように欄干に肱をついたまま、なにか厳めしい、瞑想にでも耽るような恰好で、じっと霧の奥を見つめていた。そこで僕はふと思った。奴さんたち、どうもひどく腹を空かしているらしいな。なるほど、少なくともこの一ヵ月ばかりというもの、いよいよ腹を空かしてきているにちがいない、と」（中野好夫訳による）[17]。

アチェベは、カニバリズムの観点以外にも、ジェンダーの観点からも『闇の奥』の作品に見るコンラッド批判をおこなっている。その論点は、「黒人」「白人」の女性がステレオタイプ的に語られているというものである。つまり、「黒人の女王」（black mistress）が「すばらしい野性を帯びた絢爛さ、狂暴な光を湛えた華麗さだった。一歩一歩、悠然と踏むその歩調には、なにか不吉な、それでいて一種荘重な威厳さえ感じられた。茫漠たる悲しみの荒野を、突如として領した沈黙の中に、今や豊饒と神秘の巨大な生命の一団が、まるで彼等自身の闇黒の情熱の姿を目のあたり見るかのように、粛然として彼女を注視しているのだった」（中野好夫訳による）[18]と描かれているのに対して、「白人の許嫁」（white Intended）は「血の気のない顔をした黒装束の女が、まるで揺曳するように薄闇の中を入ってきた。喪服だった。（中略）僕の両手をとると、呟くような低声で、『いらして下さいますことは存じておりました、』と言った。あまり若いとは思えなかった――つまり、少女らしい様子はないということだ。貞節、信仰、悩み、そういったものに対する、もうちゃんと大人らしい感情の持主のように思えた」（中野好夫訳による）[19]と描かれている。

アチェベの、前者が「会話をしない」、後者は「会話をする」というコンテキストをもってするコンラッド批判は的はずれの批評であるが、黒人の女性が「野性に溢れて、しかも豪華、目は怒りに燃えて、しかも昂然」、その落ち着き払った歩きぶりは「どことなく不吉でありながら、しかも荘厳」であり「荒涼たる大自然、豊饒にして神秘的な生命の巨大な母体」が「まるで、それ自身の暗い情熱的な魂の申し子を凝視しているかのように」

と描かれているのに対して、白人の女性は「黒ずくめの、青ざめた顔」の女性が「薄暮れのなかを浮遊するかのように」という歩きぶりで「喪服を着ていた」女性は「貞節や、信仰や、苦難に対する大人らしい度量」を身に備えていたと描かれている。[20]

三　ポーランドの祖国喪失者——コンラッドとマリノフスキー

1　コンラッド——文学のフロベール

ジョウゼフ・テオドール・コンラッド・ナレンチ・コジェニオフスキー（Josef Teodor Konrad Nalecz Korzeniowski）は、一八五七年十二月三日にロシアの支配下にあった東ポーランドのベルデュッェフという村の由緒ある地主階級の家柄に生まれた。彼の父アポロ・コジェニオフスキー（Apollo Korzeniowski）は急進的な独立運動に参加する指導的人物であった。一八六二年にロシア官憲に検挙され、北ロシアに流刑になり、コンラッドも両親に伴われて北ロシアに強制移住をさせられる。コンラッド五歳の時である。最初の流刑地はモスクワのはるか北方であったが、後に南のウクライナ、キエフに近い場所に移されるが、一八六五年に彼の母エヴァリーナ・ボブロフスギー（Evelina Bobrowski）が肺結核のためにこの世を去っている。コンラッド七歳の時である。一八六九年に流刑地の厳しさから彼の父もこの世を去る。コンラッドは十一歳の時に孤児になった。クラコフの叔父（母の弟）タデウス・ボブロフスギー（Tadeusz Bobrowski）に引きとられる。十七歳の時にわかに大学進学をやめてフランス船の船員となるためにポーランドを出てマルセイユに向かう。コンラッドがなぜポーランドを飛び出したのかについて「自由を求める少年の情熱」[21]とする見解と、中野好夫の「ロシア軍籍を逃れるため」とする見解がある。中野好夫はロシア軍籍について次のように記述している。

「もし、彼がこのままロシア国籍をもって故国にとどまっていれば、やがて軍籍のおそれがある。それも将校なればまだよいし、家柄からいえば当然それになれるはずだが、なにぶん父およびその兄弟たちの不穏な前歴もまだ新しい話だったために、ただの兵卒として二十五年間の軍務に服さなければならない公算が濃厚だった。彼ら一家としては、ロシアはもっとも憎む国である。そのロシア軍籍に二十五年も縛られることは、いくら反対の叔父としても、できることなら免れさせてやりたい気持ちは容易に想像できる。現に叔父は一八七二年（コンラッド十四歳）にも、彼のためにオーストリア国籍を獲らせようとして失敗しているくらいである。（同じ占領国でも、オーストリアのほうが圧政が少なかったのである。）してみれば、ここまで反対はつづけていたが、他方ではようやく、少しでもロシアから遠ざけておいてやるほうが少年のために幸福かという考えも働いて、さてこそ賛成に踏み切ったというのは、案外容易に考えられる理由なのではないか[22]」。

一八七四年十二月十一日にフランス船に乗り組んで航海に出ている。コンラッドの満十七歳の誕生日の数日後である。フランス船航海の時代の始まりであり、これが三年半ばかり続いている。一八七八年四月にイギリス船に乗り組むことになり、トルコのコンスタンチノープル（現在のイスタンブール）に航海したのがきっかけとなり一八七八年六月にイギリスに上陸する。コンラッド二十歳の時である。以後、もっぱらイギリス船に乗り組むことになり、イギリス船の船長の地位にまでのぼりつめた。一八九四年の三十八歳まで十六年間にわたって遠洋航海者の生活を送っている。船は十隻以上も替わる。一八八一年から八二年にかけてのパレスタイン号での体験は、ロンドンからシドニー、シンガポールまでの旅で、『青年』（*Youth*）（一八九八年）の作品において海難、船火事などが描かれている。『ナーシサス号の黒人』（*The Nigger of the Narcissus*）（一八九七年）の作品は一八八四年から八五年にかけての船舶名を同じくするナーシサス号でのインドからロンドンへ帰る途中での体験にもとづいている。

作家ジョウゼフ・コンラッドの誕生となる処女作『オールメイヤーの阿呆館』（*Almayer's Folly*）は一八九五年

四月に出版されている。『オールメイヤーの阿呆館』、『島の流れ者』（*An Outcast of the Islands*）（一八九六年）、『ジム殿下』（*Lord Jim*）（一九〇〇年）などの短編は、一八八七年から八八年にかけてのヴァイダール号でのシンガポール、ボルネオ、マレー群島などでの体験にもとづいている。[23]

コンラッドの英語は心細いものであったとは自分でも書いていることであるが、それでも英語は上達していると見えて、イギリス船の身分も、二等航海士、一等航海士を経て、一八八六年には船長の資格試験に合格している。ポーランドを出国して十二年後である。この年は待望のイギリス国籍を取得することができた年でもあった。なお、ロシア国籍が除籍となるのは一八八九年とあるから、それまで二重国籍でもあった。イギリスで船長の資格まで取ったコンラッドにとって一八九〇年五月から翌年の九一年一月までのコンゴ行きはきわめて重要な航海となったことは言うまでもない。

コンラッドは『闇の奥』のなかでヨーロッパの帝国主義の侵略に見る「地図の空白」についてマーロウに語らせている。コンラッドの生い立ちと重ねながらアフリカ地図の年代を推測することができる。エドワード・サイードは、『オリエンタリズム』（一九七六年）のなかで、「地理学とは本質的に、オリエントに関する知識を支えている基盤であった。（中略）西洋世界と他の世界との関係は、むき出しの欲望によって結ばれていたからである。しかも、地理学的な欲望は、発見し、現場におり立ち、暴露しようとする認識上の衝動に特有な倫理的中立性をおびることができた」[24]と述べている。それは『闇の奥』の、主人公のマーロウが「地図」に対する情熱について述懐する場面に読みとれる。

「ところで、僕は子供の時分、大変な地図気狂いだった。何時間も何時間も、よく我を忘れて南米や、アフリカや、濠州の地図を見入りながら、あの数々の探険隊の偉業を恍惚（うっとり）として空想したものだった。その頃はまだこの地球上に、空白がいくらでもあった。なかでも特に僕の心をとらえるようなところがあると、（いや、一つとしてそうでないとこ

ろはなかったが、）僕はじっとその上に指先をおいては、そうだ、大きくなったらここへ行くんだ、とそう呟いたもんだった」[25]（中野好夫訳。一部改変）。

コンラッドがコンゴ河を遡ったのは一八九〇年の夏のことであった。マーロウがコンゴ行きをする時期には、アフリカの地図には河や湖の名やさまざまな地名が書き込まれていた。『闇の奥』のなかで特定の名前は登場してこないが、コンゴ河は「大蛇」のようにという比喩をもちいて記述されている。

「なるほど、その頃はもう空白ではなかった。僕の子供時分から見れば、すでに河や、湖や、さまざまな地名が書き込まれていた。もう楽しい神秘に充ちた空白（ブランク）ではなかったし、――恣に少年時代の輝かしい夢を追った真白い地域でもなかった。すでに闇黒地帯になってしまっていたのだ。だが、そのなかに一つ、地図にも著しく、一段と目立つ大きな河があった。たとえていえば、とぐろを解いた大蛇にも似て、頭は深く海に入り、胴体は遠く広大な大陸に曲線を描いて横たわっている。そして尻尾は遥かに奥地の底に姿を消しているのだ。とある商店の飾窓に、その地図を見た瞬間から、ちょうどあの蛇に魅入られた小鳥のように、――そうだ、愚かな小鳥だ、僕の心は完全に魅せられてしまった。で、僕はふと思い出した。そういえばこの河で商売をやっている、大きな貿易会社があったはず[26]」（中野好夫訳。一部改変）。

マーロウは子どもの頃アフリカの地図を見て地図上の空白を発見してこの大地に憧れを抱いていた。しかし、探険家、宣教師たちが文明の光を掲げて流れ込むとともに、地図上の空白には地名や地形が書き込まれるようになり黒い大陸と化してしまう。この意味では、黒い大陸とは「暗黒大陸」のイメージとは逆に、文明の光がもたらされる「白い大陸」になるはずのものであった。ここには、白と黒との対比のもとに、ヨーロッパ列強によるアフリカの争奪戦に見られる「地図の政治学」を読みとることができる。サイードはこれについて「地理学的空間を得ようとする欲望を変形させて、これを地理学と文明人または非文明人とのあいだの特殊関係の理論に仕立て上げることが重要だった」と述べている[27]。コンラッドは「地理と探検家たち」という論文のなかで「アフリカ

のまだ白紙の心臓部のまんなかに、わたしの指をおいて、ここにわたしは宣言した、いつの日か、わたしはそこにゆくだろう、と」と述べているが、「もちろん、のちに彼はそこにゆく。そしてその身振りの愚劣さを、修正することになるだろう――『闇の奥』という作品によって」というサイードの言葉は名言である。[28] それはコンラッドとレオポルド二世がいずれも人種差別主義者だとするアチェベのコンラッド批判への反論ともなるものである。

ベルギーのレオポルド二世がコンゴ河流域の植民地の獲得にむけて行動を開始するのは一八七六年である。レオポルド二世は、みずから総裁になって「中央アフリカ探険文明化国際協会」(Association Internationale pour l'Exploration et la Civilization de l'Afrique Centrale) を設置して(というよりも捏造して)、「暗黒大陸」を照らす希望の星であることを訴えることで、アフリカにヨーロッパの文明の恩恵と光をもたらす高潔な人物として国際的な舞台に登場することになった。彼は一八七九年に「コンゴ国際協会」(Assoiciation Internationale du Congo/International Association of Gongo) を設置して本格的にコンゴ流域の植民地支配を企てるのである。コンゴ河流域が金、銀、銅、鉄などの資源に富む大地であることをレオポルド二世はイギリスの探検家キャメロンの報告などから知っていたのである。一八八五年五月二十九日、レオポルド二世は「コンゴ国際協会」の支配下にあるコンゴを王室布告令によってコンゴ独立国 (L'Etat Indépendent du Congo) と命名し、八月一日にはこれを公式称号として各国に通達した。これに対して、イギリスは同国をコンゴ自由国 (The Congo Free State) と命名している。名前には権力がともなう。コンラッドが接触をもつことになる「奥コンゴ貿易振興会社」(Société Anonyme pour le Commerce du Hout-Congo) は一八八八年に設置されている。レオポルド二世の右腕となったのはアルバート・ティース (Albert Thys) という人物であり、小説『闇の奥』のなかでは、一八九〇年にブリュッセルの会社の社長室でマーロウに面接した「偉大なるボスその本人」(the great man himself) として描

かれている。マーロウが偉大なるボスに会う前の待合室には大きな地図が掛かっている。[29]

「室の真中には縦の卓が一つ、壁沿いには粗末な椅子がグルリと並んでいる。そして一方の端には、虹そのままの七色に塗り分けた大きな地図が一枚かかっていた。目立って広いのは赤だ、――いつ見ても気持ちのいいもんだ、すでに本腰の仕事がそこで行われているということを示すものでね、――その次は、これも目につく青、少しばかりの緑、ところどころの橙、そして東海岸に廻ると、一箇所、紫だ。おそらく上機嫌な進歩の先駆者たちが、愉快にドイツビールでも飲み交わしているところだろう。だが、僕の行くのは、それらのどれでもなかった。それはあの黄色、奥地の真唯中なのだ。そこにこそあの河が――蛇のように、――恐ろしい、――死の魅惑を投げている」（中野好夫訳による）。[30]

アフリカの争奪戦（Scramble for Africa）の爪跡は、商社の待合室に掛けられた一枚の大きなアフリカ地図に読みとることができるだろう。赤はイギリス、青はフランス、緑はイタリア、橙はポルトガル、紫はドイツ、黄はベルギーと、『闇の奥』の小説の時代には、世界地図には植民地支配国を示す色分けがなされていたことがわかる。コンラッドの大英帝国中心の発想は「目立って広いのは赤だ。――いつ見ても気持ちのいいもんだ、すでに本腰の仕事がそこで行われているということを示すものでね」という文章のなかにも読みとることができる。

コンラッドは一八九〇年五月にフランスのボルドーを出発し、アフリカの西海岸を南下して、コンゴ河口のボーマに達し、さらに船をかえてマターディ（レオポルドヴィルの下流）に到着する。当時の根拠地を拠点にコンゴ河流域の遡航が始められる。その遡航の途中での恐怖と驚愕は『闇の奥』の作品に描かれているので触れないが、赤痢、マラリアなどで健康を害したコンラッドは単身帰国することを決めて一八九一年一月にロンドンに到着する。帰国後には海運会社のテムズ河倉庫主任の仕事をしていたが、一八九一年十一月から九三年七月まで一等航海士という条件でオーストラリアに航海している。この後も船をかえて近海航路の仕事に従事していたが、一八九四年一月にその船も降りて船員生活に終止符を打つことになった。

ジョウゼフ・コンラッドが遠洋航海者であることをやめていかにして作家として登場するのかについては英文学者の研究にゆだねるとして、一八九八年にコンラッドが南イングランド・ケント州のペント・ファームという土地に居を移したことは重要である。この近所には、キプリング、H・G・ウェルズ、ヘンリー・ジェイムズ、スティーヴン・クレインなど当時の文壇の新星とよばれた作家たちが住んでいた。トマス・ハーディ、スティーブンソン、メレディス、あるいはオースティン、サッカレー、ディケンズなどという文壇の大御所たちと交替するように、キプリング、ウェルズ、ショー、バリー、ヘンリー・ジェイムズといった新人たちが登場する。ここにジョウゼフ・コンラッドもまた新人の海洋小説作家として迎えられるようになる。

2　マリノフスキー——人類学のコンラッド

ブロニスロウ・カスパール・マリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski）は、A・R・ラドクリフ＝ブラウン（A. R. Radcliffe-Brown、後に「生まれは卑しい癖にオクスブリッジの似非貴族主義を身につけた教養あるジェントルマン」とよばれた）とともに、人類学において参与観察という方法を導入した創始者として知られている。彼の主著は『西太平洋の遠洋航海者たち』（*Argonauts of the Western Pacific*）という民族誌である（以下、『遠洋航海者』と略す）。「アルゴノーツ」（Argonauts）はギリシャ神話の金羊毛を求めて航海に出かけたアルゴー船に乗っている勇者たちのことであるが、マリノフスキーが航海者であり後に作家に転じたジョウゼフ・コンラッドの作品を熟読したことは良く知られている事実である。コンラッドはマリノフスキーよりも二十七歳年長であるが、コンラッドはロシア支配下の、マリノフスキーはオーストリア支配下のポーランド人であった。コンラッドとマリノフスキーはともにイギリス国籍を取得し、「英語」で著書を執筆している。また、祖国喪失者の二人は「イギリス人らしさ」でも共通している。[31]

マリノフスキーは、一八八四年四月七日、ポーランドのクラコフに生まれた。[32] 父（Lucjan Malinowski）は貴族であり富裕層というわけでもなかったが、クラコフのヤギェウォ大学でスラブ言語学を教えていた教授であり、マリノフスキーが語学をよくしたのは、父の素質に負うところが大きかったといわれている。しかし、父は一八九八年に亡くなった。マリノフスキー十四歳の時である。母（Józefa Łącka）もまた知識人であったという。マリノフスキーは若い時代に弱視という眼病を患っていたが、母は彼を転地療養のために温暖な土地に連れて行った。彼らはイタリア北部、地中海、マルタ島、シシリー島、カナリア諸島などを旅した。マリノフスキーは青年期にはポーランド南部のタトラス山麓にあるザコパネという保養地で過ごした。彼の親友にはスタニスワフ・イグナツィ・ヴィトケヴィッチ（Stanisław Ignacy Witkiewicz, 1885–1939）がいた。ヴィトケヴィッチがマリノフスキーと親しくなったのは一九〇〇年頃のことである。ヴィトケヴィッチはポーランドを代表する劇作家で画家になった。山口昌男によると、ヴィトケヴィッチは、一八八五年に、当時ロシアに占領されていたポーランドのワルシャワに生まれた。彼の父は著名な画家で批評家でもあったが、一八九〇年に、彼が五歳の時、父が病弱であったためにザコパネに移った。ザコパネは「当時、民俗文化を背景とした土地柄の故に新しく発見された〈未開〉の文化の趣き」があったという。彼の父は「世紀末ポーランドの知的・芸術的運動の推進者」であり「印象派の画風を開拓し、民俗文化の価値を説き、山地民の手工芸や建築の価値を認める」運動を推進していた。この二人の外に、レオン・チウステック（Leon Chwistek）という数学者であり哲学者であり画家にもなった少年も加わって、彼らは劇や詩を朗読したり科学を探究したりしていたという。[33]

マリノフスキーはクラコフの大学で物理学と数学を専攻し、後に哲学に移り一九〇八年に哲学博士の学位を受けている。その時の論文題目は「思想の経済原理について」（O zasadzie ekonomii myślenia）であった。マリノフスキーの学問が基本的に自然科学の発想に基づいているのはこのような背景によるものである。その後、マリ

ノフスキーは二年間の予定でドイツのライプチヒ大学の物理化学研究所に赴いて勉学をしているうちに、フレーザーの『金枝篇』を読んで民族学という学問に興味をもつようになる。彼の経歴の初期の段階が自然科学であったことは呪術と宗教を科学的に解釈しようとする問題意識をもった要因となったのであろう。あるいは、クラコフという中世ヨーロッパの学問の都の感化によるものだろうか。[34] ライプチヒ大学では民族学者のカール・ビュッヘル（Karl Bücher）に学んでいる。その後、民族心理学者のヴィルヘルム・ヴント（Wilheim Wundt）に師事して学んだ。一九一〇年にマリノフスキーはロンドンに渡りロンドン大学経済学院の大学院に籍を置いた。当時のロンドン大学経済学院では、婚姻史のエドワード・ヴェステルマルク（Edward Westermarck）、メラネシア研究（後にスーダン研究）のC・G・セリグマン（Charles G. Seligman）の指導のもとに、一九一三年に『オーストラリア・アボリジニの家族―社会学的研究』（*The Family among the Australian Aborigines: A Sociological Study*）（以下、『アボリジニの家族』と略す）をロンドン大学出版会から出版した。この本は大英博物館の資料をもとに執筆されたものである。マリノフスキーは一九一四年にはイギリスの資金でオーストラリアの野外調査の旅に出かけるのである。その翌年、『原始宗教と社会構造の諸形態』（*Wierzenia pierwotne i formy ustro ju społecznego*）と題する著作をポーランド語で出版している。調査に出かけると第一次世界大戦が始まるが、オーストラリア政府はマリノフスキーに長期にわたって野外調査をすることを許可した。調査の許可がおりたこととマリノフスキーの苦悩はまだ別の問題でもあったはずである。野外調査は、(1)一九一五年のニューギニアのマイルー調査、(2)一九一五年から一九一六年にかけてのトロブリアンド諸島調査、(3)一九一六年の同地方調査である。(1)の調査結果は「マイルーの原住民」として発表されて彼の学位論文となったものである。(2)(3)の調査はトロブリアンド諸島の調査であり、のちに『遠洋航海者』に展開するものである。一九一九年にメルボルンに帰ったマリノフスキーはエルシー・ロサリン・メーソンと結婚する。一九二一年にロンドン大学経済学院の講師となり『遠洋航海者』が

出版されるのは翌年である。フィールドワークによる二十世紀の人類学という学問の設立憲章のパイオニアとしてのマリノフスキーについて青木保はポーランドとの関わりで次のように記述している。

「マリノフスキーは、クラコフに生まれヤギロニア大学で物理学の学位（全オーストリア帝国の金賞授与という栄誉）をとった後、健康上の理由もあって物理学者になることを諦めライプツィヒへ行き、ヴントの下で研究し、そこでフレーザーに魅せられてイギリスへ渡る。その後は周知の如しだが、戦前の母国における評価は国を捨て流出した学者として半ば批判の対象とされ、またポーランド文化の海外における『展示』とされた。一九二二年に同大学が教授職のポスト（ポーランド最初の社会人類学のポスト）を彼に提供しようとしたが、彼はそれを拒否してロンドンに留まった。そこで一九二七年に教授になる。戦後の社会主義ポーランドでは彼はイギリス植民地主義・帝国主義をかつぐ代表的存在として批判されてきた。ここ数年、初めて彼の全業績が見直され、ポーランド社会科学の中で再評価され、そのポーランド語による著作集の刊行も始められた。ポーランドの『春』のはじまりとともに（中略）〈学生たちはいま初めてマリノフスキーを特別の感情移入もまた偏見もなしに読み始めた〉[35]」。

四　『闇の奥』と民族誌

1　文化の窮状——コンラッドとマリノフスキー

ジェームズ・クリフォード（James Clifford）は、『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』（*The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*）（一九八八年）のなかで、スティーヴン・グリーンブラッドの『ルネサンスの自己成型』の表題から名づけられた第三章「民族誌的自己成型」（ethnographic self-fashioning）において、「二十世紀の初頭にコスモポリタニズムと格闘し、彼ら自身の〈文化的な意味における真実と嘘〉のヴァージョンを作り上げた二人の故郷喪失者、すなわちコンラッドとマリノフスキーの

各々の著作のなかで、この主体性の力強い節合について探ってみたい[36]」と述べてコンラッドとマリノフスキーをとりあげている。

「コンラッドは第三番目の言語として二十歳から学びはじめた英語で偉大な作家（彼のモデルはフロベールである。）になるという、ほとんど不可能に見える偉業を達成した。彼の著作を通じて、文化的言語的な規範が、技巧でもあり同時に必然でもあるという感覚が見出されたとしても、驚くにはあたらない。英語作家になってゆくという彼の執筆者としての生涯は、民族誌的主体性の範型を示している。彼の一生は、諸言語間の翻訳につねにつきまとう感覚の構造、すなわち規範というものの恣意性についての深い自覚、つまり新しい世俗的相対主義を作動させるのである。

マリノフスキーは、『「W・H・R・」リヴァースが人類学のライダー・ハガードであるならば、私はコンラッドになろう』（B・Z・セリグマンへの手紙）と述べている。彼はおそらく、多文化を調査する（特性と系図を収集する）リヴァースの方法と、単一のグループを集中的に研究する彼自身の方法との違いを念頭に置いていたであろう。マリノフスキーにとってコンラッドという名前は、深さ、複雑さ、そして精妙さの象徴であった。（そうした意味でフィールド日記のなかで彼の名を引合いに出している。）しかし、マリノフスキーは、人類学のコンラッドではなかった。彼のもっとも直接的な文学モデルは、間違いなくジェイムズ・フレーザーであった。また、多くの著作において、彼はゾラを、すなわち、高められた〈雰囲気〉とともに事実を提示する自然主義者としてのゾラを想起させる。ゾラの科学的＝文化的描写は、道徳に満たされた人道主義的アレゴリーを生み出すのである。人類学は、それ自身のコンラッドをいまだ待ち続けている[37]」。

クリフォードは、『闇の奥』は「自身を英国と英語へと沈潜させてゆく困難なプロセスに関する、コンラッドのもっとも深遠な瞑想である[38]」と語っているが、同作品は英文学の世界に新しい着想をもたらすことになった。コンラッド・コジェニョフスキがコンゴ河遡行に出かけた時に彼の最初の小説となる『オールメイヤーの阿呆館』の最初の数章を携行していったことはよく知られている。マリノフスキーもまた『遠洋航海者』のための野

外調査に出かけた時に文学を耽溺するように読んだことは一九一四年から一八年までのトロブリアンド諸島滞在中の私的な日誌『マリノフスキー日記』（以下、『日記』と略す）[39]から解読することができる。『日記』はポーランド語で書き留められたものであり、出版を意図したものではなかったが、『日記』の公開は、コンラッドと同様に「マリノフスキーは人種差別者であった」というアメリカでの弟子の告発に対してイギリスの弟子たちが猛烈に反発する論争にまで展開している[40]。「マリノフスキーの呪詛はメラネシアの人びとに対してと同じウェイトでイギリスのお偉方にも向けられていた[41]」のも真実である。『日記』にはコンラッドの作品が頻繁に登場する。

コンラッドはマリノフスキーより二十七歳年長であるが、コンラッドがロシア支配下の、マリノフスキーはオーストリア支配下のポーランド人であったことはすでに述べたところであるが、クリフォードはマリノフスキーとコンラッドの親縁性について次のように述べている。

「マリノフスキーとコンラッドはお互いに既知の間柄であったし、すでに有名な作家となっていた年長者に対するマリノフスキーのコメントから、彼がお互いの窮状に親縁性を感じ取っていたという証拠を見ることができる。それには理由がある。すなわち、ともに歴史的な偶然によって、ヨーロッパのコスモポリタン的アイデンティティへと運命づけられたポーランド人であったこと、そして、ともにイギリスで野心的な作家の経歴をたどったことである。（中略）この二人の異郷生活者は、ポーランド人特有の文化的距離を共有していたと推測できる。というのも二人は、十八世紀以来、集合的アイデンティティという虚構――しかしながら熱烈に信じられていたシリアスな虚構――としてしか存在しなかった国に生まれているからである。さらには、広大な領地を基盤にもつ少数の貴族階級が存在するという、ポーランドの特異な社会構造が、社会のあらゆるレヴェルにおいて貴族的な価値を著しく際立たせていた。ポーランドの教養ある異郷生活者たちは、ヨーロッパの支配的なブルジョワ的価値に魅了されることはなかった。彼らは一定の距離を保っていたのである。（中略）いずれにせよ、コンラッドに対するマリノフスキーの強い親近感については疑いない[42]」。

マリノフスキーは最初の著作『アボリジニの家族』をポーランド語の献辞とともにコンラッドに献呈している。

マリノフスキーとコンラッドとの知遇は短期間であったが、マリノフスキーがコンラッドの影響を受けたことは疑いのないことである。『日記』と『遠洋航海者』のテキストを詳細に分析すれば、マリノフスキーの民族誌的自己成型において、コンラッドのアフリカの物語から、あの有名な「嘘」――『闇の奥』においてマーロウの語りにみられる両義的な一連の嘘をとりいれてマリノフスキーがいかにして『遠洋航海者』という民族誌を書き上げたのかを解明することができる。[43]

2　コンラッドとマリノフスキーの多言語世界

コンラッドには、結婚さえ予想されないではない恋愛関係にある女性がいた。この女性はベルギーのブリッセル在住の義理のいとこにあたるマルグリート・ポラドフスカ（Margurite Poradowska）という未亡人である。亡夫もポーランド人で、コンラッドとは遠縁にあたっていた。一八九〇年のコンゴ行きに向けて契約する際に、マルグリートの夫に交渉の話の仲介にはいってもらったという関係で彼女に知り合うことになったのだが、その後まもなく夫が死んでからも、未亡人のマルグリートとの交際はずっと続いていた。マルグリートはフランス人であるが、何編かの小説その他の著作まで出している有名なフランス語作家でもあったこともあり、それはかなりの部分、文学的な関係であった。コンラッドは「彼女に宛てて情熱的で自己を披瀝するような手紙」[44]、「相当立ち入った心境まで打ち明けており、ほとんど愛情に近いものまで感じさせる手紙」[45]をフランス語で書いている。叔父のタデウスもコンラッドとマルグリートとの関係を憂慮するほどであったが、このフランスの女性との関係は不発に終わり、コンラッドはジェシー・ジョージ（Jessie George）というイギリス人の女性と結婚してしまうのである。[46] クリフォードは、女性にとりまかれた複雑な窮状のなかで、コンラッドには三つの言語が互いに翻訳と干渉を生み出しながら作動していると述べている。

「コンラッドは、アフリカに出発する直前の数ヵ月、十五年前に船乗りになるために出奔して以来はじめてポーランドに戻った。その経験は、彼が維持していた堪能なポーランド語にさらに磨きをかけ、また子供時代を過ごした場所や好悪の入り混じった感情との結びつきを復活させたのである。ポーランド（実際にはロシア領ウクライナ）から彼は、コンゴの職場へとほとんど直行した。そこでの彼は、修得した言語のなかではもっとも流暢なフランス語で話し、しかし『日記』は英語で書き、おそらくは『オールメイヤーの阿呆館』の各章の執筆も続けた。（中略）アフリカでコンラッドは、アイルランド人のロジャー・ケイスメントと交友を結び、通常は英国人船員紳士としての気取った態度を保っていた。〔マルグリート・〕ポラドフスカへの情熱的な手紙は続き、それらは相変わらずフランス語で書かれた。彼の母語は、蘇生したばかりであった。コンゴの経験は、最大限の言語的に複雑さをともなう時期であった。コンラッドは、いつも何語で考えていたのだろうか？」[47]。

マリノフスキーの『日記』は、ポーランド語とともに、英語、ドイツ語、フランス語、ギリシャ語、ラテン語、さらにネイティヴの言語（モトゥ、マイレゥ、キリウィナ、ピジンの四種）の単語や語句を頻繁に用いて書かれているという。また、レイモンド・ファース（Raymond Firth）はマリノフスキーのフィールドノートが出版を想定して英語とネイティヴの言語で書かれているのを目撃している[48]。コンラッドと比較して、クリフォードは、マリノフスキーを三つの言語を超えた多言語世界に生きる人類学徒として描いている。

「マリノフスキーは、フィールドにおいてポーランド語で日記をつけ、その言葉でオーストラリアの敵前線の向こうにいる母親と手紙を交わした。彼は、文化人類学に関する事柄について、ロンドンにいる指導教授のC・G・セリグマンへは英語で手紙を書いた。オーストラリアにいるフィアンセの［E・R・M］（エリーズ・R・マッソン）へ頻繁に手紙を書いたが、それも英語であった。しかしながら、この他に昔の恋人であった少なくとも二人の女性のことが気にかかっており、うち少なくとも一人はポーランドと関係していた。彼のもっとも親しいポーランド人の友人であり、やがて後に重要なアヴァンギャルドの芸術家・作家となるスタニワス・ヴィトケーヴィチ（『日記』の「スタシ」）のこと

もまた、しばしば脳裏に浮かんできた。二人は一緒に太平洋を旅し、マリノフスキーがトロブリアンドに逗留する直前に不仲になっていた。彼は事態を修復しようと望んだが、友達のほうはいまはロシアにいた。英語とポーランド語によって媒介されたこれらの諸関係に、言語コード化された第三番目の世界、すなわち彼がそこで生活し生産的に仕事をしなければならないトロブリアンド世界が割り込んでくる。マリノフスキーとトロブリアンド島民との日々の生活のやりとりはキリウィナ語でなされ、やがて彼のフィールドノートは、主として口語言葉で記録されるようになった」[49]。

コンラッドとマリノフスキーとは、ポーランドを離れる時期において決定的な違いがある。コンラッドは幼少期でありマリノフスキーは青春期である。また、コンラッドがロシア帝国の占領下の、マリノフスキーはオーストリア帝国の占領下のポーランドというように国籍においても違いがある。そして彼らはいずれもイギリス国籍を取得していることにおいては同じである。さらに、コンラッドはネリー号の船主である会社重役、弁護士、会計士の英国紳士たちとマーロウとを語らせるし、アイルランド人の在コンゴ領事のケイスメント（筆者注・アイルランドの独立運動家。独立のためにドイツに援助をもとめたため反逆罪で死刑となった）と交友を結び英国紳士を装うのである。これに対して、マリノフスキーについては、マリノフスキーの末娘のヘレナがイギリス国籍を取得した時のエピソードを語っている。

「（それは）一九三一年の夏のことである。ロンドン大学経済学院の学生や聴講生たちがマリノフスキーの来るのをセミナー室で待っていた。セミナー室は学生たちでいっぱいになり風通しも悪かった。誰も窓を開けようとするものがなかったからである。マリノフスキーは室内に余分な空気がはいるのが嫌いだったこと――アングロサクソンの『熱狂的なアウトドア派』とヨーロッパ大陸の『外国人』とをすぐに分ける人間が嫌いだったことはよく知られていた。マリノフスキーが大またで部屋に入って来て、到着するやいなや要求した。〈窓を開けなさい！［両腕を広げる身振りで］広く!! もっと広く!! もっと広く!!! 本日、君たち分かりますか、私は英国紳士になったのです〉[50]」。

これは英国紳士（a British gentleman）になったマリノフスキーの喜びが視覚的にも想像できるエピソードで

ある。第一次世界大戦後に新しいポーランド国家が生まれるとマリノフスキーはポーランド旅券を取得しイギリス国籍を取得するまで使っていた。マリノフスキーのアメリカ合衆国との関係が始まるのは、イギリス社会人類学においてラドクリフ＝ブラウンが勢力を伸ばしてくる時代でもあるが、一九二六年のカリフォルニア大学においてであり、以後、一九三三年のコーネル大学、一九三六年のハーバード大学と続いている。そして、一九三八年に彼はアメリカ合衆国に渡り、翌年イェール大学の客員教授となる。一九四二年にはイェール大学の正教授に就任することを承諾していたが、教授就任の発令を待たずに五月十五日に客死したのである。この死の直前には末娘のヘレナによればマリノフスキーがアメリカ国籍を取得したいと洩らしていたという。ヘレナはマリノフスキーの国籍の観念がわれわれとは異質なのだと述べている。[51] ポーランドがドイツ軍とロシア軍の挟撃にあって崩壊した時代である。この時のマリノフスキーの心境はいかなるものだったのか。若き日のマリノフスキーの想いは『日記』のなかにも読みとることができる。

(1)「マキアヴェリを読んでいた。多くの言辞がとても印象深かった。そのうえ多くの点でマキアヴェリは私とよく似ている。すなわち完全なヨーロッパ的心性とヨーロッパ的問題をかかえたイギリス人たるこの私と。イザベルに対する態度の描写、知的理解がにじみでた愛情、両者（知的理解と愛情）が織りなす絵模様――」（一九一五年二月一日付）。[52]

(2)「今朝、風呂に入っている時に（オーストラリア共同管理に関する新立法について）とりとめもない考えにとらわれ、こうひとりごちた。イギリス人の第一の欠点は、彼らの生活が『多層化』していないことだ――彼らの生活にはひとつの流れしか存在しない。ひとつのものが来てはまた去り、次のものに置き換わる。そこにいるだけなのだ。そこには何の反省も継続的な体系化も見られない。E・R・Mにもぜひこの問題について考えてもらいたい」（一九一七年十一月二十二日）。[53]

(3)「就寝。――終日、文明への憧れ。メルボルンの友だちが懐かしい。夜も更けてから小舟のなかで、愉快な野心を抱く。私はきっと〈著名なポーランド学者〉になってみせる。民族学的脱線はもうこれが最後だ。これが終わったら、

あとは建設的な社会学、方法論、政治経済学などに専念しよう。ほかのどこよりもポーランドでこそ、私の抱負を実現しやすいに違いない。――それにしても、文明生活を前提とした私の夢や希望と、未開人と暮す今の私の生活とでは、えらい違いだ。現在の生活から怠惰やぶしょうという要素を排除しなければならない。役にも立たぬ小説など読むな。独創的なアイデアを忘れてはならない」（一九一七年十二月二十一日）[54]。

(4)「ユゼフ・コシチェルスキーを思い出した。彼のことをどう言い表したら良かろう。貴族院議員の息子で、皇帝の友人で、ブロッホの孫にあたる――ベルリンで彼と交わした会話が思い出される（ヤン・ヴウォデクの紹介で、モルシュティンとコシチェルスキーに引き合わされた）。それから［ヴァイセンホフ］嬢のことを思い出した――今でも私のことを覚えていてくれるだろうか。ポーランドのさまざまな人びとと会う時のことを想像してみた。もしE・R・Mと結婚したら、やがてポーランド的なものとは疎遠になることだろう。彼女との結婚を考える時に、この点が一番ためらわれるところだ――彼女の方はどうなのだろう。海と空を眺め、私の思いはまたE・R・Mへと戻っていった。彼女と二度と再び会えないのではないかなど、考えただけでも悲しいことだ――テントに戻って夕食。『テス』を読む」（一九一八年一月四日）[55]。

(5)「ユーモアのセンス（イギリス風のではなく、私流の、すなわちB・M流にE・R・M風を加味したもの）を養わなければならない」（一九一八年一月十七日）[56]。

(6)「私はE・R・Mの面前でストロングに向かって言ったのだ。イギリス人は自己保全と現状肯定の権化であり、世界はその掌中に握られているのだと。そこには熱狂も理想主義も目的もない。だが、ドイツ人には目的がある。なるほどそれは下劣で歪んだ目的にすぎぬかもしれぬが、そこには躍動が、使命感がある。［民族主義者］に［説教する］保護主義者、プロイセン主義者と［結託する］民主主義者――何もかも思想の混同だ。ボールドウィンの件などのせいで、私はアングロ・サクソン［嫌い］とは言わぬまでも、決して熱狂的なアングロ・サクソン［びいき］ではなくなった」（一九一八年二月二十一日）[57]。

(7)「瞬時のきらめきのようにE・R・Mへの想いが燃え上がる（オーストラリアとポーランドの政治問題について考

えをめぐらせる。かわいそうなトミー〔イギリス軍〕（白人）兵士に対する愛称）についての新聞記事を見つけた。ラファエル夫妻の様子を眺め、続いて『パリ生活』のきわどい諷刺漫画に目を落とす――彼女こそ私にとって唯一の女性であるという思いが、ますます頻繁に胸をよぎる）」（一九一八年四月八日）[58]。

(8)「ポーランドや〈ポーランドの女性〉について考え、E・R・Mがポーランド人でないことを初めて心の底から残念だと思う。だが、私たちの婚約は決定的ではないかもしれぬという考えだけは、断固として退けた。ポーランドへ帰ろう、そして私の子供たちはポーランド人になるのだ」（一九一八年四月十六日）[59]。

マリノフスキーの愛と野望は、F・R・S〔王立協会会員〕――C・S・I〔インド星勲章叙勲者〕――「サー」の称号などと『日記』のなかに記述されるが、その愛と野望の果ては、一九一八年六月二十七日付けの『日記』にあるように、調査終了の直前に母の訃報に接したマリノフスキーにおいて、ポーランドの郷愁とともに「闇の奥」に隠されてしまう。

「思いはすぐにポーランドに、過去へと帰って行く。私の心に暗い深淵が、虚ろな穴が口を開けているのがわかる。私の性格の特徴である情緒面における狭量さにもかかわらず、その虚空から目をそらそうと努める。しかし私の悲しみは余りにも強く、深い。楽しい考えなど何ひとつ浮かばない。存在自体が悪であるという感じ。――宗教的信仰のもつ浅薄な楽観主義について、ずっと考え続けている。霊魂の不滅を信じるためなら何だって犠牲にしよう。誰か近しい人、愛する人の死のまわりに漂うこの恐るべき神秘性。口に出さなかった最後の言葉――光が放つべき何ものかに覆いがかけられ、人生の残りは半ば闇のなかに隠されてしまった」[60]。

マリノフスキーの「口に出さなかった最後の言葉」は、コンラッドの『闇の奥』のなかで語られている「一つの話の意味は核のように話の内側に納まっているのではなく、その外側、つまり、白熱光がそのまわりに生み出す陽炎のように、そう、時おり、月の光に妖しく照らされて見えてくる朦朧とした月の暈にも似た、物語を包む雰囲気のなかにこそあったのだ」（藤永茂訳による）[61]を想起させる。クルツが死の間際に発した「地獄だ！　地獄

だ！」は、マーロウを救済する、曖昧ながらも光明を与えてくれる力のある最後の言葉となったがマリノフスキーを救済するものではなかった。クリフォードは、コンラッドが「英国／英語」作家という人格のなかで自己を再構築したのに対して、マリノフスキーは「書く」という行為をとおして自己を解体や鬱屈から救済したと述べている。[62]

五　おわりに

マリノフスキーは、『日記』のなかで、トロブリアンド諸島の調査の折に、コンラッド、キプリング、ライダー・ハガード、サッカレー、デュマ、ジョージ・ムア、O・ヘンリー、スウィンバーン、ブロンテ、ウィリアム・J・ロック、メアリー・フット、H・G・ウェルズ、ホッキング、モンテスキューなどのヨーロッパ文学（三文小説を含む）を耽溺するように読んでいる。サイードの『文化と帝国主義』の手法をもちいてマリノフスキーの『遠洋航海者』という民族誌が「小説」を読むという行為のなかでいかにして自己成型がなされたのかを分析することができるのではないか。また、マリノフスキーは現地調査でドイツのオセアニア民族学者フリッツ・グレープナー（Fritz Grabner）と語らい、ケンブリッジ大学トレス海峡総合調査団のアルフレッド・コート・ハッドン（Alfred Cort Haddon）と出会い研究指導を受けている。彼は『人類学の覚書と質疑』（第四版、一九一二年）をもとに、W・H・R・リヴァース（W. H. Rivers）、C・G・セリグマン、R・R・マレット（R. R. Marett）などの著作を読みながら調査に従事しフィールドノートを作成し原稿を執筆していた。[63] これらの原稿を執筆するためにも小説はひとつの触媒になったように思われる。

コンラッドの『闇の奥』の舞台となったコンゴ河流域については、エミール・トルディー（Emil Torday）と

いうハンガリーの人類学者が一九〇〇年から一九〇九年まで調査している。この人類学者の足跡については一九九一年に「エミール・トルディーとコンゴの芸術　一九〇〇―一九〇九年」と題する企画展が大英博物館・人類博物館で開催された。[64] トルディーの民族誌とコンゴの視覚芸術との関わりでコンラッドの『闇の奥』の作品を解釈しようとする私の構想は本論文の続編として発表する予定である。『闇の奥』作品が細部にわたってコンゴ河流域の人びとの生活様式とともに映像と仮面などによって精緻に再検討されることになるであろう。

（追記）

一九九一年にケンブリッジ大学にアフリカ研究所客員研究員として着任した時に、筆者はケンブリッジ大学考古学・人類学博物館のハッドン図書館にあるオセアニア関係資料を調べたことがあった。また、その時、大英博物館の人類博物館の企画展「エミール・トルディーとコンゴの芸術　一九〇〇―一九〇九年」を何回もケンブリッジからロンドンに通って鑑賞したことがあった。後日、企画展を担当したジョン・マック博士には大阪の国立民族学博物館で再会することができた。ケンブリッジ大学に留学する以前には、ガーナ調査の折にナイロビからアクラに向けて飛ぶエチオピア航空の機内から蛇行するザイール河を見ながらキンシャサに着陸した遠い記憶がある。現在ではザイール河はコンゴ河とその名称がコンラッドの時代に戻っているが、旧ザイール共和国を中心に地域紛争が起きたことは周知の事実である。

本稿では、コンラッドの『闇の奥』の作品に出会うことによって、人類学の黎明期の民族誌とは何かを探究するものになった。マリノフスキーに縁のあるハッドンと、コンラッドに縁のあるトルディーとの思考的な出会いの結果でもある。『闇の奥』の世界はチェ・ゲバラの時代も現在も「地獄」である。リンガラの音楽がキンシャサの町に流れていた時代がとても懐かしい。

(1) 本稿では、コンラッドの『闇の奥』のテキストは、Joseph Conrad, *Youth, Heart of Darkness, The End of the Tether*, London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1961 (1902) を用いている。
(2) ハナ・アーレント『全体主義の起源』大島道義・大島かおり訳、みすず書房、一九八一（一九七二）年、一〇五—一〇六頁。
(3) 高橋哲哉「《闇の奥》の記憶」『記憶のエチカ—戦争・哲学・アウシュヴィッツ』岩波書店、一九九五年、八九—九〇頁（初出「《闇の奥》の記憶—アーレントと『人種』の幻影」『思想』第八五四号、一九九五年）。
(4) アーレント、前掲書、一一三—一一四頁。
(5) 高橋、前掲書、八五頁。
(6) アーレント、前掲書、一一一頁。
(7) アーレント、前掲書、一二一頁。
(8) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、岩波書店、一九五八年、七頁。
(9) 小池　滋『ロンドン—ほんの百年前の物語』中央公論社、一九七八年、二二頁。
(10) 正木恒夫「『闇の奥』の遠近法」『植民地幻想—イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房、一九九五年、二〇四—二〇五頁。
(11) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一七頁。
(12) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、二六—二七頁。
(13) メルヴィン・ブラッグ『英語の冒険』三川基好訳、講談社、二〇〇八年、二九三、四四三—四四四頁。
(14) Chinua Achebe, "An Image of Africa: Racism in Conrad's *Heart of Darkness*," (in) *Hopes and Impediments: Selected Essays*, New York: Doubleday, 1990, pp. 1–20, 177 (*Massachusetts Review* 18 (4) (Winter 1977): 782–794); Hunt Hawkins, "The Issue of Racism in *Heart of Darkness*," *Conradiana: Journal of Joseph Conrad* 14 (3) (1982): 163–171; Cedric Watts, "'A Bloody Racist': About Achebe's View of Conrad," *The Yearbook of English Studies* (Modern Humanities Research Association) 13 (1983): 196–209 がある。

(15) Ewa Kujawska-Lis, "Turning Heart of Darkness into a Racist Text: A Comparison of Two Polish Translations," *Conradiana: Journal of Joseph Conrad* 40 (2) (2008): 165–178.

(16) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、七五頁。

(17) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、八二―八三頁。イギリスの航海者、北極探検家のジョン・フランクリンとの対応で解釈することが必要である。一八四五年に北西航路の発見に努め目的を達成したが北極海で氷に閉じ込められて全滅し、その後の探検調査で隊員が人肉を食べて飢えを凌ごうとしたことが明らかになったという「カニバリズム」の記憶である（コンラッド『闇の奥』藤永茂訳、三交社、二〇〇六年、訳注、二〇七頁）。

(18) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一二六頁。

(19) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一五四頁。

(20) コンラッド『闇の奥』藤永茂訳、二〇〇六年、三交社、一六〇、一九三―一九四頁。また、アチェベのコンラッド批判に対する再批判については、Watts, *ibid.*, pp. 200–201 を参照されたい。

(21) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1960, pp. 32, 32n.

(22) 中野好夫「人と生涯」中野好夫編『二十世紀英米文学案内3　コンラッド』研究社、一九六六年、九頁。

(23) 中野、前掲書、五―一九頁。中野好夫「コンラッド小伝」コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、岩波書店、一九五八年、一六四―一六五頁。また、John Batchelor, *The Life of Joseph Conrad*, Oxford: Blackwell Publishers Ltd., 1996 (1994) を参照した。

(24) エドワード・サイード『オリエンタリズム 下』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九九三年、四二頁。

(25) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一四頁。

(26) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一五頁。

(27) サイード、前掲書、四三頁。

(28) エドワード・サイード『文化と帝国主義1』大橋洋一訳、みすず書房、一九九八年、三一六頁。なお、「地理と探検家たち」は Joseph Conrad, *Last Essays*, Richard Curle (ed.), London: Dent, 1926, pp. 10–17。

(29) 藤永茂『「闇の奥」の奥―コンラッド・植民地主義・アフリカの重荷』三交社、二〇〇六年、四三―四八頁。

(30) コンラッド『闇の奥』中野好夫訳、一八―一九頁。

(31) 現代の文化人類学者によるイギリス人の参与観察については、Kate Fox, *Watching the English: The Hidden Rules of English Behaviour*, London: Hodder and Stoughton Ltd., 2004.

(32) マリノフスキーとポーランドについては、Grażyna Kubica, "Malinowski's Years in Poland," (in) Roy Ellen, Ernest Gellner, Grażyna Kubica, Janusz Mucha (eds.) *Malinowski between Two Worlds: The Polish Roots of an Anthropological Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 88–104。また、ポーランド出身の作家コンラッドと人類学者マリノフスキーを対比することによる、帝国冒険小説と人類学との関係については、Christina A. Thompson, "Anthropology's Conrad: Malinowski in the Tropics and What he Read," *The Journal of Pacific History* 30 (1) (1995): 53–75。さらに、ポーランドの大学教授たちについては、Andrze K. Paluch, "Malinowski's Theory of Culture," (in) Roy Ellen, Ernest Gellner, Grażyna Kubica, Janusz Mucha (eds.) *Malinowski between Two Worlds: The Polish Roots of an Anthropological Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 65–70, 71–87 を参照されたい。

(33) 山口昌男『文化人類学への招待』岩波書店、一九八二年、九―一〇頁。また、マリノフスキーの生涯については泉靖一「マリノフスキーとレヴィ＝ストロース―人間の科学としての文化人類学」泉靖一責任編集『世界の名著59 マリノフスキーとレヴィ＝ストロース』（中央公論社、一九六七年）を参照した。なお、泉靖一は京城帝国大学の学生時代に秋葉隆をとおしてマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』と出会う。『遠洋航海者』の民族誌は「帝国」を中心とする「周辺」の民族や人種に関する民族誌のモデルとなった（阿久津昌三「鈴木榮太郎論―『辺境』の位座からみた社会学原理の構築」『三田社会学』第10号、二〇〇五年、六七―八〇頁）を参照されたい。

(34) スタンレー・J・タンバイアは、『呪術・科学・宗教』のなかで、マリノフスキーの呪術、宗教、科学についてタイラー、フレーザーと対比させて論じている（Stanley Jeyaraja Tambiah, *Magic, Religion, and the Scope of Rationality*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990）。また、フランシス・コッポラの映画『地獄の黙示録』（Apocalypse Now Redux）では、カーツ（クルツ）大佐はエリオットの詩を朗読し、また、フレーザーの『金枝

篇』を読んでいるという設定になっている。ウィラード大尉によるカーツ大佐の殺害はフレーザーの〈王殺し〉の主題を連想させるものである。

(35) 青木保「『二〇年代神話』の破壊—社会人類学における一九二〇年代」『思想』第六八九号、一九八一年、五三—五四頁。

(36) ジェイムズ・クリフォード「民族誌的自己成型—コンラッドとマリノフスキー」清水展訳、ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ほか訳、人文書院、二〇〇三年、一二五頁。

(37) クリフォード、前掲書、一二五—一二六頁。

(38) クリフォード、前掲書、一二六頁。

(39) Bronislaw Malinowski, *A Diary in the Strict Sense of the Term*, Valessa Malinowski (ed.) New York: Harcourt, Brace, and World, 1967（『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、平凡社、一九八七年）。

(40) Edmund Leach, "On Reading A Diary in the Strict Sense of the Term on the Self Multilation of Prof. Hsu, Malinowskiana," RAIN 36 (February 1980).

(41) 青木、前掲書、五一頁。なお、イギリス社会人類学の系譜と展開について、阿久津昌三『アフリカの王権と祭祀—統治と権力の民族学』世界思想社、二〇〇六年を参照されたい。

(42) クリフォード、前掲書、一二七—一二八頁。

(43) George W. Stocking, Jr., "Empathy and Antipathy in the Heart of Darkness: An Essay Review of Malinowski's Field Diaries," *Journal of the History of the Behavioral Science* 4 (2) (1968): 189–194.

(44) クリフォード、前掲書、一三〇—一三一頁。

(45) 中野、前掲書、一九六六年、二三頁。

(46) 中野、前掲書、一九六六年、二三頁。

(47) クリフォード、前掲書、一三〇—一三一頁。

(48) Raymond Firth, "Malinowski in the History of Social Anthropology," (in) Roy Ellen, Ernest Gellner, Grażyna Kubica, Janusz Mucha (eds.) *Malinowski between Two Worlds: The Polish Roots of an Anthropological*

Tradition, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. 13.

(49) クリフォード、前掲書、一三二頁。

(50) Heelena Wayne (Malinowska), "Foreword," (in) Roy Ellen, Ernest Gellner, Grażyna Kubica, Janusz Mucha (eds.) *Malinowski between Two Worlds: The Polish Roots of an Anthropological Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. xiii.

(51) Wayne, *ibid.*, p.xiv.

(52) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、一三〇頁。

(53) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、一九四頁。

(54) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、二四一―二四二頁。

(55) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、二五九―二六〇頁。

(56) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、二七九頁。

(57) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、三〇九頁。

(58) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、三六〇頁。

(59) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、三七〇頁。

(60) 『マリノフスキー日記』谷口桂子訳、四二五頁。

(61) コンラッド『闇の奥』藤永茂訳、三交社、二〇〇六年、一八頁。

(62) クリフォード、前掲書、一三八頁。

(63) マリノフスキーの民族誌については、Michael W. Young (ed.) *The Ethnography of Malinowski: The Trobriand Islands 1915-18*, London: Routledge & Kegan Paul, 1979; George W. Stocking, Jr., *The Ethnographer's Magic and Other Essays in the History of Anthropology*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1992 などを参照されたい。

(64) John Mack, *Emil Torday and the Congo 1900-1909*, London: Trustees of the British Museum/British Museum Publications, 1991.